

（１）”王様の耳はロバの耳”で有名なミダス王が、太陽神アポロンによって、触るものが何でも金になるという、地獄の幸せを与えら、その結果、自分の娘に触ったとたん娘は金に変わってしまった。

（２）イソップ寓話集（紀元前6世紀）「金の斧」、他に「金のライオンをみつけた男」有り。日本では、1593年に『イソポのハブラス (ESOPPO NO FABVLAS) 』として紹介されたのが始まりで、これはイエズス会の宣教師がラテン語から翻訳したものと考えられており、天草にあったコレジオ（イエズス会の学校）で印刷されたローマ字のものである。その後江戸時代初期から『伊曾保物語』として各種出版され、普及し、その過程で「兎と亀」などのように日本の昔話へと変化するものもあらわれた。

「あるきこりが斧を川に落としてしまい嘆いていると、ヘルメス神が現れて川に潜り、金の斧を拾ってきて、きこりが落としたのはこの金の斧かと尋ねた。きこりが違うと答えると、ヘルメスは次に銀の斧を拾ってきたが、きこりはそれも違うと答えた。最後に失くした斧を拾ってくると、きこりはそれが自分の斧だと答えた。ヘルメスはきこりの正直さに感心して、三本すべてをきこりに与えた。

それを知った他のきこりは、わざと斧を川に落とした。ヘルメスが金の斧を拾って同じように尋ねると、そのきこりはそれが自分の斧だと答えた。ヘルメスは呆れて何も渡さずに去り、恥知らずなきこりは自分の斧をも失った。」

ヘルメス神ではなく女神やニンフが現れたり、場所を川ではなく泉や池として語られることが多い。日本の昔話にも同様の話が存在するが、女神ではなく水神様となっている。

（３）金印。天明四年（1784）3月16日に金印発見、十代将軍家治治世、老中田沼意次の世。史書「後漢書・倭伝」に書かれた次の記事に注目する。

「建武中元二年（57）、倭の奴国、貢を奉り朝賀す。使人、自ら太夫と称す。倭国の極南界なり。光武、賜ふに印綬を以てす。」

材質：金95%、銀4.5%、銅0.5%、質量：108.729g、比重：17.94

日本は、不老不死の仙薬を求めた秦の始皇帝の命によって、徐福が東海にある蓬莱山を求めて辿り着いた国であり、晩年の光武帝にとって東海の国「倭奴國」からの使節の到来は誠に慶事であったのだろう。

(4) 山上憶良 (齊明天皇 6 年 6 6 0 – 天平 5 年 7 3 3)

「白銀も黄金も玉もなにせむに勝れる宝子にしかめやも」

「神代より言ひ伝て来らくそらみつ大和の国は皇神の厳しき国言霊の幸はふ国と語り継ぎ言ひ継がひけり」(「神代欲理 云傳久良久 虚見通 倭國者 皇神能 伊都久志吉國 言霊能 佐吉播布國等 加多利繼 伊比都賀比計理」『万葉集』卷 5-894)

(5) マルコ・ポーロ (Marco Polo, 1254-1324) は日本では、ヨーロッパに日本のことをジパング (Zipangu) の名ではじめて紹介したことで知られている。『東方見聞録』(“*La Description du Monde*”)では、日本は「黄金の国ジパング」と紹介されているが、マルコ・ポーロは実際に日本には訪れておらず、中国で聞いた噂的な話として収録されている。また、「黄金の国」というのは中尊寺の金色堂についての話を聞いたものらしい(中尊寺を建立した奥州藤原氏は十三湊を介した対中国交易を行っていた)。また、遣唐使時代の留学生の持参金や、日宋貿易においての日本側の支払いにおいて、金が使われた事により、「日本は金の国」という認識が中国側に広まっていたと考えられる。もともと中国では、金の産出がほとんどなく、日本では金が採れた。アラビアをふくめた西方にあっては金が高い。アラビア人にとって、中国にやってくる最大の目的は金を得るためであり、一方、アラビア人に金をわたさねばならぬ中国商人にとっては、それを得るために日本にやってくるという背景があった。尚、日本人については「人を食べる」という記述有り。

(6) コロンブス (Cristoforo Colombo, 1451-1506) も新大陸と黄金を求めて遠洋航海。

大航海時代の幕開けは、胡椒 (Piper nigrum, pepper) を求めての冒険だった。胡椒は、強力な殺菌・抗菌作用が知られており、冷蔵技術が未発達であった中世においては、料理に欠くべからざるものでもあり、大航海時代に食料を長期保存するためのものとして極めて珍重された。ヨーロッパの様々な料理に使われており、またその影響を受けた様々な料理でも使われている。このため、インドへの航路が見つかるまでは、ヨーロッパでは非常に重宝されていた。取引には、金と胡椒が同重量で交換された時代もあった。ゲルマン部族のリーダーであったアラリック 1 世はローマ帝国に侵略を控える代わりに金、銀、そして胡椒を貢物として要求した。

(7) インカ帝国の崩壊と金

インカ帝国というアンデス山脈に居を構えた巨大な国家を支えていたのが金の採掘。しかし、豊富な金を求めるスペインによって攻めほろぼされた。その際にインカの王が自分の助命嘆願として差し出した金の価格は、今の価格で数十億円と言われているから、インカ帝国がどれほど豊かであったか想像がつく。

しかし、スペイン側は金を受け取りながらも王を許さず、処刑。さらに有名な太陽神殿やその他の寺院なども、全て奪いつくした。ただ、その莫大過ぎる量（一説に5トンとも）が一気にヨーロッパに流通したおかげで、インフレを引き起こし、スペインの国力を弱めることになってしまった。歴史の皮肉。

金というのは希少性の高い金属。なにしろ、金の埋蔵量は極端に少なく、1トンの金鉱石から3グラムも取れば上出来。そこで、中世ヨーロッパでは他の金属から金を生み出す研究が盛んに行われました。これが有名な錬金術(alchemy)。残念ながら、金を作り出す事はできできなかったが、錬金術から生まれたさまざまな技術が、現在の科学の始まりとなっている。